

きものに関するキーワード探索研究(第4報)

渡邊 芳道* 寺田 恭子**

内山 道子** 知野 恵子***

The Reserch of Kimono's Keywords (Part IV)

Yoshimichi WATANABE, Kyouko TERADA

Michiko UCHIYAMA, Keiko CHINO

1. はじめに

きものの長い歴史に比べれば、戦後の50年は、わずかな期間でしかないが、経済発展とともに生活様式は著しく変化した。合理性を求めた生活はきものの伝統を軽視してきたように思う。

第2次世界大戦後、きもの(業界)にはいくつかの変革期があったが、現在、最も大きな転換期を迎えていると考える。産地、問屋、流通、小売、すべての段階で非常に状況が悪化している。特に百貨店の呉服売場は、スペース、場所も縮小され、特選呉服、高級呉服、実用呉服に分かれていた売場もすべてのきものが一緒に販売されるようになり、きものの顔が一層見えにくくなってきている。

こうした原因は、伝統産業であるきもの業界が、戦後、民族服としての和服に対する戦略も政策もなく、軽視した結果、時代の変化にきちんと対応できなかったことにありと思われる。戦後の合理的な生活は、洋服化、既製服化を促進し、非合理的なきものが徐々に着られなくなり、売れなくなったときに、日常着の実用呉服の数量を諦める代わりに、高額な振袖や留袖、訪問着といったフォーマルな分野の礼装着に重点を注いだ結果ではないかと考えられる。

日本伝統から来る通過儀礼としての年中行事に対して礼装着が必要だとする戦略は、経済的にゆとりのある消費者には、説得力があり、一時的に売り上げの確保に貢献したかもしれないが、フォーマルな場でのきものの着装が行き渡った現在、ファッションとしては夏のゆかたの人気の高くなってきている。

そこで、第1報、第2報、第3報に続き、第4報においては、「美しいキモノ」創刊以来47年間の編集テーマを年代ごとに区切り、各分野毎に分析項目をまとめ、(1)きもの地、(2)きものの種類、(3)きものの用途、(4)オケーションの変化の変遷を戦後のきもの史の一環としてその軌跡を考察した。

* 服飾美術学科ファッションビジネス研究室

** 服飾美術科第3被服構成研究室

*** 服飾美術学科被服衛生学研究室

2. 研究方法

(1) 分析資料

きもの専門誌「美しいキモノ」 出版社 婦人画報社

(2) 分析期間

1953年冬号から1999年秋号 47年間 計177冊

(3) 分析項目

- 1) きもの地
- 2) きものの種類
- 3) きものの用途
- 4) オケージョン

3. 分析結果

(1) きもの地

きもの地を染めのきもの、織りのきものに二大別した。またこれらに含まれないきもの地を、その他のきもの地とした。染めのきものとして13のキーワード、織りのきものとして18のキーワード、その他のきもの地として9のキーワードにまとめ、きもの地の変遷を考察した。

1) 染めのきもの(表1)

小紋、ゆかた、友禅、絞りの順に出現頻度が高い。小紋とゆかたは、60年代前半に最も多く出現し、90年代前半に第2の出現頻度を示す。友禅は50年代後半に最も多く出現し、80年代前半に第2の出現頻度を示す。60年代前半と90年代前半のように小紋とゆかたの出現頻度が高いときに友禅が低くなる現象がみられた。90年代後半には、小紋とゆかたの出現頻度が下がり、

表1 染めのきもの

(N)

種 類	年 代										合計
	~55	~60	~65	~70	~75	~80	~85	~90	~95	~99	
小紋(江戸小紋・付け下げ小紋・京染小紋・型染小紋・紅型染小紋・小紋調・小紋風など含む)	26	48	89	45	40	27	34	30	55	21	415
友禅(加賀友禅・京友禅・手描友禅・型友禅・小紋友禅・友禅調など含む)	11	22	7	11	7	7	19	16	8	21	129
紅型(琉球紅型・紅型調・紅型風など含む)	4	10	4	3		5	2	2		2	32
型染(中国型染・藍型染など含む)	2	4	4	2	1		3	1	9	1	27
更紗(和更紗・絹島更紗・インド更紗・ジャワ更紗・シヤム更紗・フランス更紗など含む)	4	5	15	6	2		1		13	1	47
絞り(綾絞り・鹿の子絞り・有松絞り・鳴海絞り・匹田絞りなど含む)	3	19	16	10		3	8	12	1	10	82
ローケツ染め・ローケツ風・蠟染め		3	2								5
色無地・無地染め			1	1	1		2	3	3	1	12
草木染め	3	7	9	6		11	1		4		41
藍染め			1	2	1	6	1				11
長板中形・江戸中形・ちちろ中形		1	2			1		1		2	7
ゆかた(ちりめん浴衣・ちちろゆかた・しほのゆかた含む)	16	26	34	10	14	10	10	20	28	18	186
その他(ぼかし染め・珊瑚染め・南部古代染め・茶屋染め・虹染め)			4	2			3	1		1	11
合 計	69	145	188	98	66	70	84	86	121	78	1005

友禅が高くなったため、小紋、ゆかた、友禅がほぼ同数になっている。絞りは50年代後半に最も多く出現し、続けて60年代後半にも多く出現している。

その他の出現頻度の低い染めのきものについて見ると50年代後半に紅型、ローケツ染め、60年代前半に更紗、その他、70年代後半に草木染め、藍染め、90年代前半に型染め、80年代後半から90年代前半に色無地・無地染め、60年代後半と90年代後半に長板中形が多く出現している。

2) 織りのきもの(表2)

表2 織りのきもの

(N)

種 類	年 代	~55	~60	~65	~70	~75	~80	~85	~90	~95	~99	合計
お召(西陣お召・塩沢お召・桐生お召・十日町お召・秩父お召・紋お召・風通お召・紋紗お召・縫取お召・マジョリカお召など含む)		63	140	96	10	60	41	2			2	414
紬(大島紬・結城紬・小千谷紬・上田紬・石下紬など含む)		12	54	81	60	66	85	88	76	73	41	641
緋(村山大島・久留米緋・琉球緋・伊予緋など含む)		17	53	69	15	7	10	9	14	11		205
縞・格子		7	20	10	4	2	2	4	3		2	54
黄八丈(八丈・秋田・米沢・黒八丈など含む)		3	2		5	1	1					12
銘仙(秩父銘仙・足利銘仙・伊勢崎銘仙など含む)		6	8	1				1				16
十日町		1	3	1								5
西陣						4	9	4				17
花織り(沖縄・ロートン)								2			1	3
塩沢(本塩沢・夏塩沢)				1	2		1		1		2	7
上布(宮古・越後・八重山・能登・琉球など含む)		4	1	5	1	2	3	6	10	10	3	45
芭蕉布					1		1		1		6	9
縮(小千谷縮・明石縮含む)					4	2	3	7	2	16	5	39
縮緬(丹後縮緬・長浜縮緬・お召縮緬・縫取縮緬・一越縮緬)		10	18	8								36
紗(翠紗・紋紗・マジョリカ紗・レース紗・紗合わせなど含む)		3	11	21	10	3		6	5	5	4	68
紹・駒紹				5	6						1	12
生紬・紗紬・紹紬・阿波しじら								4	9	4	2	19
その他(江戸唐織・博多織・風通織・すかし織・絹さつま・絹紅梅など)		1	6	3				1	1	2		14
合 計		127	322	307	106	147	156	134	122	121	74	1616

紬、お召、緋の順に出現頻度が高い。紬は80年代前半に最も多く出現し、50年代後半以降はほぼ平均的に出現するが、90年代後半に低くなる。お召は50年代後半に突出して出現するが、60年代後半には低くなり再び70年代前半に復活した。その後は後退し出現しなくなるが90年代後半に少数出現した。緋は60年代前半に最も多く出現するが、60年代後半に激減し、少数出現し続けるが90年代後半にさらに衰退する。90年代後半に紬・緋が減少する中80年代後半から90年代前半に全く出現していなかったお召が少数であるが復活している。

その他の出現頻度の低い織りのきものについて見ると、50年代後半に縞・格子、銘仙、十日町、縮緬、その他、60年代前半に紗・紗合わせ、紹・駒紹、60年代後半に黄八丈、70年代後半に西陣、80年代前半に花織り、60年代前半と90年代後半に塩沢、80年代後半から90年代前半に上布、90年代前半に縮、90年代後半に芭蕉布、80年代後半に生紬などが多く出現している。

3) その他のきもの地(表3)

表3 その他のきもの地 (N)

種類	年 代	~55	~60	~65	~70	~75	~80	~85	~90	~95	~99	合計
ウール (ウール縮緬・ウールお召・ウール小紋・緋ウール・ウール絞り・ウール紗・ウールポーラ・サマーウール・シルクウール・セルなど)		3	66	56	12	7	5	5				154
毛織物 (ギャバジン・ウーステッド・英ネル)		2		1								3
絹織物 (タフタ・サテン・バックサテン)		2	1									3
麻織物 (リネン・リネトン)		1		1				1				3
綿織物 (オーガンジー・もめん・古代もめん)		3	2	1	5		8					19
化繊・広幅化繊・合繊・交織・洋服地・広幅生地・広幅緋		11	6									17
レース (エバグレース・テトロンレース)		2	13	1								16
プリント・ボーダープリント			10	1								11
その他 (グログラン・ジャージ・ナイロンチュール・輪ビロード)		2	2									4
合 計		26	100	61	17	7	13	6	0	0	0	230

その他のきもの地では、ウールの出現頻度が高い。50年代後半と60年代前半が特に高く、60年代後半から減少し80年代前半まで出現している。

その他のきもの地は50年代前半から60年代前半まで多種多様に渡り出現している。

以上のことから染めのきものでは、小紋、ゆかた、友禅、絞り、織りのきものでは、お召、緋という代表的な染め、織りのきもの地が47年間の時代の流れのなかで50年代後半から60年代前半に最も多く出現している。さらに織りのきものとして最高峰である紬は常に高く出現していることがわかった。また、その他のきもの地では、ウールが最も多く出現し、これも50年代後半から60年代前半にかけて最も多く出現している。さらに、50年代前半から後半にかけて、毛、絹、麻、綿織物や化繊、合繊など、きもの地以外の生地が多種にわたり出現しているのが特徴的である。

(2) きものの種類

きものの種類のキーワードを格付けに準じさらに用途別(礼装着、略礼装着、外出着・おしゃれ着、普段着)に区分し、年代ごとに区切り、関連項目別に14のキーワードに分類し変遷を考察した。(表4)

1) 礼装着

打掛(白打掛、白無垢、打掛を含む)、留袖(黒留袖、留袖、色留袖、江戸袷を含む)、喪服、振袖(黒振袖、本振袖、振袖、中振袖、色振袖、小振袖を含む)の4項目に分類した。留袖、振袖の出現頻度は多く60年代後半と、80年代後半から90年代前半にかけて高い値を示している。

2) 略礼装着

訪問着、色無地、付け下げ(付け下げ小紋を含む)の3項目に分類した。訪問着の出現頻度は非常に多く、2つのピークを持ち、特に50年代後半から60年代前半にかけて最も高い値を

表4 きものの種類

(N)

用 途	種類	年代	～55	～60	～65	～70	～75	～80	～85	～90	～95	～99	合 計
礼 装 着	打掛 留袖 喪服 振袖	掛袖 袖	2	1		1			4				8
			5	5	10	22	11	3	17	33	21	5	132
						3	7		3		1	1	15
			6	11	24	51	4	4	27	45	43	19	234
(小 計)			(13)	(17)	(34)	(77)	(22)	(7)	(51)	(78)	(65)	(25)	(389)
略礼装着	訪 問 着 色 無 地 付 け 下 げ	着 地 無 地 下 げ	68	216	181	58	1	18	43	61	75	42	763
						1	1		2	3	3	1	11
			1			8	9	13	25	28	20	7	111
(小 計)			(69)	(216)	(181)	(67)	(11)	(31)	(70)	(92)	(98)	(50)	(885)
外 出 着 おしゃれ着	小 お 紋 お 召 召 袖	紋 召 袖	23	40	72	48	41	30	32	26	48	28	388
			56	133	94	10	4	2	2			2	303
			9	47	86	62	68	86	95	96	81	51	681
(小 計)			(88)	(220)	(252)	(120)	(113)	(118)	(129)	(122)	(129)	(81)	(1372)
普 段 着	緋 銘 仙 ウ ー ル ゆ か た	緋 銘 仙 ウ ー ル ゆ か た	14	43	79	15	7	10	9	14	11	1	203
			8	6	1				1				16
			3	45	48	11	4	6	5	3	4	1	130
			16	26	34	10	14	10	10	20	28	22	190
(小 計)			(41)	(120)	(162)	(36)	(25)	(26)	(25)	(37)	(43)	(24)	(539)
合 計			211	573	629	300	171	182	275	329	335	181	3185

示し、第2のピークは80年代後半から90年代前半になっている。付け下げは80年代前半から80年代後半に出現している。

3) 外出着・おしゃれ着

小紋(江戸小紋を含む)、お召、袖の3項目に分類した。小紋は60年代前半に高い値を示しているが、平均的にどの年代でも出現している。お召は50年代後半から60年代前半に非常に多く出現しているが、60年代後半からは急激に下降し、80年代後半90年代前半は消滅している。袖は60年代前半から多く出現しているが、70年代後半から90年代前半にかけて更に高い値を示している。その他の年代も安定して出現している。

4) 普段着

緋、銘仙、ウール、ゆかたの4項目に分類した。緋は60年代前半に出現頻度が多いが、60年代後半から下降している。ウールは50年代後半から60年代前半にかけて高い値を示しているが、60年代後半からは下降している。ゆかたは50年代後半60年代前半と、90年代前半に出現頻度が多くなっている。

以上のことから、きものの種類を全体でみると、礼装着は60年代後半と、80年代後半から90年代前半、略礼装着は50年代後半から60年代前半と、80年代後半から90年代前半、外出着・おしゃれ着は50年代後半から60年代前半と、80年代前半から90年代前半、普段着は50年代後半から60年代前半と、90年代前半に出現頻度が多かった。いずれも50年代後半から60年代後半と、80年代前半から90年代前半の2つの年代が高い値を示し、流れの変化があることが明

らかになった。

(3) きものの用途

きものを用途別に分類する上で、これまでと同様に、格付けに準じて礼装着、社交着、おしゃれ着、普段着の4項目に分類した。また、今回は5年ごとに用途の出現数を集約し、年代ごとの変化を検討した。さらに、1報、2報、3報に出現した用途の項目で、同類と思われる項目は1つにまとめ表を集約した。

1) 礼装着(表5)

表5 きものの用途別分類(礼装着)

(N)

用 途	年 代	～55	～60	～65	～70	～75	～80	～85	～90	～95	～99	合 計
礼装着 第一礼装		1		14	4	14	19	25	20	12		109
祝い着		2		2			1	2	1	1		9
儀式着		1					1					2
正装 盛装			2				1		2	3		8
喪服 準喪服					3	7	3	2		7		22
準礼装 セミフォーマル										2	1	3
合 計		4	2	19	11	14	25	29	25	24		153

礼装着を表5のように6種類にまとめた。中でも礼装着・第一礼装が最も多く、次いで喪服・準喪服であった。礼装着・第一礼装の出現数が急激に上昇したのは、60年代後半である。この頃から、第一礼装である留袖や振袖といった高級きものが受け入れられるようになり、礼装着は結婚式や成人式といった人生の節目に登場した。

2) 社交着(表6)

表6 きものの用途別分類(社交着)

(N)

用 途	年 代	～55	～60	～65	～70	～75	～80	～85	～90	～95	～99	合 計
パーティー着		1	18	21	5	5	4	14	22	19	1	110
晴 着			10	5	24	7	5	3	5	3	3	65
イブニングキモノ・カクテルキモノ・ホステスキモノ			6	9							1	16
およばれ着			1	4		3			2		1	11
ニューキモノ			4	1								5
社交着 よそゆき着			1		1				7	1		10
ニューフォーマル								1				1
新社交着									1	1		2
合 計		1	40	40	30	15	9	18	37	24	6	220

社交着の中でパーティー着、晴着は年代を通してほとんど出現している。パーティー着は、50年代後半から60年代前半、80年代から90年代前半にかけて出現頻度が高い。また、正月用のきものとしての晴着も50年代後半から60年代にかけて特に出現頻度が高い。

3) おしゃれ着(表7)

表7 きものの用途別分類(おしゃれ着)

(N)

用 途	年 代	～55	～60	～65	～70	～75	～80	～85	～90	～95	～99	合 計
外出着		14	98	49	17	4		6	10	3		201
おしゃれ着			17	39	20	10	10	14	18	13	11	152
街 着			29	27	4	3			1			64
しゃれ着			16	1	1		2		2	1	3	26
旅行着 お座敷着 お買物着			2		1							3
合 計		14	162	116	43	17	12	20	31	17	14	446

用途別分類の中でも、最も出現頻度の高かったのは外出着、次いでおしゃれ着であった。外出着は社交着と同様に、50年代後半から60年代にかけて集中している。おしゃれ着、街着も同傾向を占めているが、おしゃれ着はその後高い出現頻度を保っている。

4) 普段着(表8)

表8 きものの用途別分類(普段着)

(N)

用 途	年 代	～55	～60	～65	～70	～75	～80	～85	～90	～95	～99	合 計
普段着 日常着		3	18	6	4	4	1			3	3	42
家庭着		2	4	1	1							8
遊び着 散歩着			3							1		4
インスタント着				1								1
おけいこ着					2					1		3
ちょいちょい着					1							1
合 計		5	25	8	8	4	1			5	3	59

普段着、日常着も社交着、おしゃれ着同様、50年代後半から60年代にかけておしゃれ着ほどではないが出現している。その後ほとんど姿を消していくが、90年代に入り、ここ数年のゆかたブームが高まってか、少し息を吹き返してきたように思われる。

(4) オケージョン

1) オケージョンの再構成

オケージョンに関するキーワードを分析する場合、年中行事とT.P.Oに分けて行ってきた。年中行事の場合は季節(春・夏・秋・冬)を基準にし、T.P.Oにおいては用途(礼装着・社交着・おしゃれ着・普段着)との関連において分析した。

季節や用途についての分析結果を総合して、きもののオケージョンを考えるには、季節や用途区分の枠を超えて、着用目的や着用場面、着用時の区分を再分類する必要がある。そこで、次の4つのオケージョンに分類した。

① ハレの場面である通過儀礼、儀式としてのフォーマルなきもの。つまり、婚礼・結婚式、

入学・入園・卒業式、成人式、七五三、年始などである。

② 現在では減少傾向にある、ケの場面で着る普段着としてのきもの。つまり、家庭、休日、週末、買物、街着などがある。

③ ハレとケの中間にあるきもの。つまり、趣味、教養としての日本の文化的なきものである。茶道や華道、日本舞踊など伝統文化への接近が、成熟した女性の嗜みの一つとして浮上してきている。またこうした社交の場を通じてのコミュニケーションの場となっている。

④ ハレでもなく、ケでもない遊びの分野。つまり、ファッションとしてのきもの存在である。しかし、これまで和服業界がきものをファッションとして捉えていたかどうかは非常に疑問であるが、キーワード探索結果において市場は存在していると考えられる。海外旅行、ホテル、食事、クラス会など洋服では味わうことの出来ない粋な楽しみ方がきものには以前からあった。

以上のように、オケーションを ①通過儀礼、儀式としてのきもの(礼装着) ②趣味、文化教養としてきもの(社交着) ③実用的な日常着としてのきもの(普段着) ④ファッションとしてのきもの(おしゃれ着)に区分した。4区分に再分類した分析項目とデータを表9・表10・表11・表12に示し、考察した。

2) オケーション別の特徴

① 通過儀礼、儀式としてのきもの(表9)

表9 通過儀礼、儀式としてのきもの

(N)

用 途	年 代										合 計
	～55	～60	～65	～70	～75	～80	～85	～90	～95	～99	
婚礼、結婚式	4	8	4	5	7	9	4	18	15	8	82
年 始	2	28	47	6	11	17	21	20	17	9	178
七五三	1	3	1	6	3	13	7	9	9	7	59
園遊会			1			1			2	13	17
入学、入園				3	9	9	6	5	6	3	41
成人式				1		2	3	6	8	3	23
十三詣、宮参					5	5	3	6	3	5	27
卒業式					1	1	2	7	10	3	24
歌 会							2	2			4
銀婚式								1		2	3
見合い								1		1	2
叙勲の日									1		1
合 計	7	39	53	21	36	57	48	75	71	54	461

フォーマルなオケーションのきものが注目された経過を見ると、50年代後半から60年代の前半は、正月はきものという程に年始に重点があり、以後この傾向は90年代前半まで引き続いていた。次に70年代は入学入園がオケーションの中心となっていた。70後半から七五三の場合の着装場面が注目された。80年代後半から婚礼、結婚式の場面が誌上の中心となっている。

90年代に入ると、若い女性をターゲットにした成人式、卒業式の装いが話題となった。90年代後半は園遊会がテーマとして浮上している。

② 趣味、教養としてのきもの(表10)

表10 趣味、教養としてのきもの

(N)

用 途	年 代	～55	～60	～65	～70	～75	～80	～85	～90	～95	～99	合 計
お茶席		2	5	6	2	2	7	6	24	28	43	125
劇場、発表会		2	1	5	1	1		1		2	2	15
節 句		1				1		1		1	2	6
梅雨、雨			4	3		2	3	1			1	14
招待、訪問			1	17	7	6	3				3	37
初 詣				1		1	2					4
お稽古					1	3				1	2	7
合 計		5	11	32	11	16	15	9	24	32	53	208

この分野では、大きく2つのピークがある。第1は、60年代前半に見られるご招待、訪問、発表会、劇場などの習い事から派生したオケージョンである。第2は、80年代後半から脚光を浴びる茶道関連の「お茶席」が中心になる。

③ 普段着としてのきもの(表11)

表11 ファッションとしてのきもの

(N)

用 途	年 代	～55	～60	～65	～70	～75	～80	～85	～90	～95	～99	合 計
七夕、夕涼み			3	2		1			2			8
街、街角			1	5	4	23	22	11	6	2	4	78
休 日			1			2	1			1	1	6
買 物				1	2	8	19	10				40
家 庭				1								1
週 末					1	2	1				2	6
夏休み					1		1			1	1	4
下 町							3		1			4
遊園地							1					1
海 辺							1					1
花 火											1	1
合 計			5	9	8	36	49	21	9	4	9	150

70年代に集中した傾向が見られ、ファッションのカジュアル化とともに買物、ショッピング、街角など、ストリートを中心とした普段着がテーマになっていたことが分かる。

④ ファッションとしてのきもの(表12)

ファッションとしてきものを捉えていたのは、50年代であったと考えられる。オケージョンテーマとしては、外出、昼、午後などのタウンウェアとしてのきもの、また、クリスマス、

表 12 ファッションとしてのきもの

(N)

用 途	年 代	～55	～60	～65	～70	～75	～80	～85	～90	～95	～99	合 計
パーティー		4	5	10	6	5	3	17	31	27	20	128
夜、宴会		2	11	6	5		5	1			1	31
昼、午後		2	16	6		12	3	1				40
集まり		2	6								1	9
外 出		1	11	5	6	1	2	3			2	31
クリスマス			11	8	2	2	1					24
旅、旅行			3	4	4	5	14	3		3	5	41
散歩、散策			1	3		3	14	8	2	1		32
ホテル				2				1			3	6
避暑、軽井沢				2						2	1	5
謝恩会					4	2	4	1	5	6	6	28
P T A					1							1
食べ歩き						6	3				1	10
クラス会						3					2	5
テークタイム								1				1
画 廊									1			1
合 計		11	64	46	28	39	49	36	39	39	42	393

宴会など夜の集まりをテーマとするオケージョンが注目された。以後、パーティでの着装が60年代、70年代、80年代まで引き継がれ、80年代後半から90年代前半にかけてきものが社交着として確立し、定着してきたといえる。この動きと平行して「謝恩会」が脚光を浴びている。

70年代後半、若い女性のアンソノ族を反映し、旅、旅行、散歩、散策、食べ歩きなど探訪シリーズがきもののオケージョンとして登場した。

年代別の推移を見ると、戦後のきもののオケージョンテーマが要約できる。きものを通過儀礼、儀式としての着用場面が注目されるようになったのは、バブル時代の80年代後半以降である。趣味、文化教養としてテーマが多く登場するようになったのは90年代になってから脚光を浴びている。普段着、ファッションとしてのきものが割合多く取り上げられたのは70年代であった。この結果からオケージョンテーマをみると、年代毎に着装場面の範囲が狭り、日常生活から遊離して非日常的な場面にしか存在しなくなってきたことが分かった。

4. 要 約

きもの地、きものの種類、きものの用途、オケージョンについて、出現頻度の高いアイテムを年代別に取り出し、特徴をまとめた。

(1) 50年代の特徴(図1) おしゃれ着・日常着志向の時代

戦後の復興期にあたり染織業界が再開され、各きもの産地が本格的に生産を開始し、新しいきもの作りに旺盛な年代である。訪問着、お召、小紋(おしゃれ着)、ウールの出現頻度が高

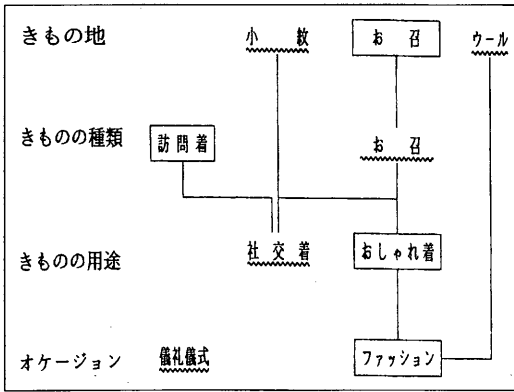


図1 50年代関連図(おしゃれ着・日常着志向)

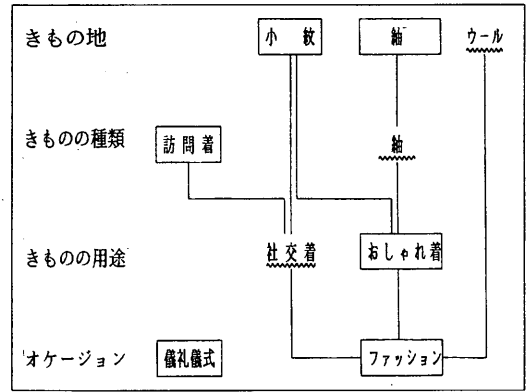


図2 60年代関連図(きもの全盛時代)

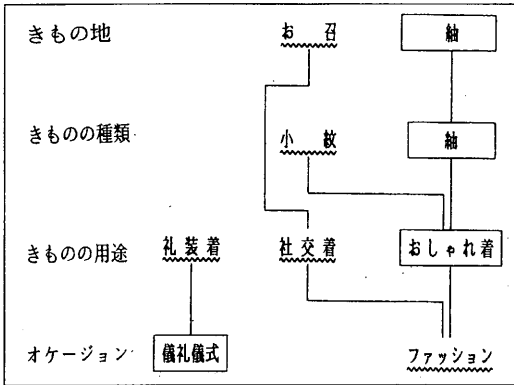


図3 70年代関連図(フォーマル化志向)

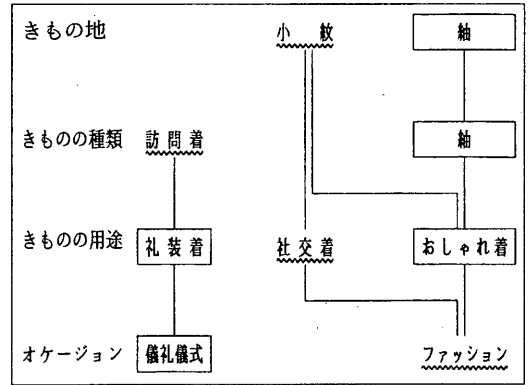


図4 80年代関連図(高級・高額化志向)

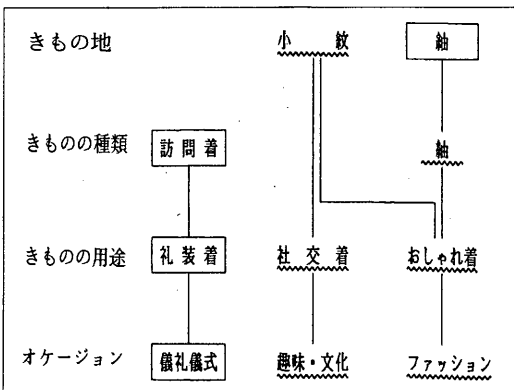


図5 90年代関連図(儀礼儀式化)

□ 出現頻度第1位
 ~~~~~ 出現頻度第2位

い。また、オーストラリアから羊毛が輸入され、保温性、ドライクリーニングなど取り扱いの手軽さから、ウールのきものが多く生産され、ファッションとして注目された。

(2) 60年代の特徴(図2) きもの全盛時代

高度経済成長期に入り、生活の向上が著しく、訪問着、小紋、紬の出現頻度が高く、お召から紬に変化し、ウールなどおしゃれ着、社交着として広範囲にきものが着装されていた。

(3) 70年代の特徴(図3) フォーマル化志向の時代

既製服化とともに和装から洋装化への進展が著しい年代である。紬、お召、小紋(おしゃれ着)が中心であったが、'73年のオイルショック以後、経済低成長の下で、きものは高級化、高額化、フォーマル化してきた。

(4) 80年代の特徴(図4) 高級・高額化志向時代

生活様式の多様化が進み、きものはさらに高級・高額化し、礼装着の出現頻度が高い。おしゃれ着では希少価値の高い紬が根強く維持された。

(5) 90年代の特徴(図5) 儀礼儀式化時代

作家物、ブランド物が商品化されますます高額化、フォーマル化へと進展した。

## 5. まとめ

世界に誇れる日本の民族衣服である「きもの」について、47年間戦後のきもの史の軌跡を考察した。

50年代後半から60年代前半の15年間は、きものにとって華やかな時代であり、いろいろな種類のきものの出現頻度が高い値を示している。様々な用途できものを着装していたと思われる。国民生活の向上とともに、より高額化志向となり、また洋装化の進展によりきものはフォーマルな時に用いられるようになってきた。1973年のオイルショックを境にきものに関するキーワードの出現頻度も下降し、再び80年代前半から90年代前半の15年間にかけて上昇の傾向にはあったものの、きもの本格化志向により高額化が進み、日常着が減少してきていると思われる。90年代になり若者の間でゆかたがファッションの一部としてブームになり現在も続いている。このような変遷の中で、きものは特別な時、または行事の時に着装するとらえ方が多くなっている。

21世紀という新たな時代に向けて、「きもの」は大きく分けて3つの方向性があると考えられる。

(1) 儀礼儀式としての衣服

(2) 伝統工芸品として保存する染織

(3) ファッションアイテムとしての衣服

これからの国際化に向けて、きものという枠を越え伝統回帰ともいえる日本趣味がファッションに広がり、日本文化に関わる多様な展開があると考えられる。

参考文献

- 1) 美しいキモノ。東京, 婦人画報社, 1953創刊号～1999秋号
- 2) きものに関するキーワード探索研究。東京家政大学生活資料館紀要, 第2集, 1997, p.45～56
- 3) きものに関するキーワード探索研究(第2報)。東京家政大学博物館紀要, 第3集, 1998, p.75～87
- 4) きものに関するキーワード探索研究(第3報)。東京家政大学博物館紀要, 第4集, 1999, p.91～103
- 5) 最新きもの用語辞典。東京, 文化出版局, 1987.
- 6) 木村考のきもの・しきたり辞典。東京, 婦人画報社, 1988.
- 7) 藤本やす他:被服平面構成。東京, 衣生活研究会, 1991.
- 8) 田中千代:新・田中千代服飾辞典。東京, 同文書院, 1991.
- 9) 和裁・初級編。東京, 財団法人日本ファッション教育振興協会和裁専門委員会, 1995.
- 10) 和裁・中級編。東京, 財団法人日本ファッション教育振興協会和裁専門委員会, 1995.
- 11) 荒木健也:染色シリーズ(2)・友禪。東京, 装道出版局, 1997.
- 12) 荒木健也:染色シリーズ(5)・中形・江戸小紋。東京, 装道出版局, 1995.
- 13) きもの教本。東京, 財団法人民族衣裳文化普及協会, 1980.
- 14) 日本服飾小辞典(Ⅰ)東京, 源流社, 1979.
- 15) きもの用語大辞典。東京, 装道出版局, 1991.
- 16) 呉服に強くなる本。東京, 日本繊維新聞社, 1997.
- 17) ファッション教育99。東京, 財団法人日本ファッション教育振興協会(1999) p.77～88
- 18) ファッション辞典。東京, 文化出版局, 1999.